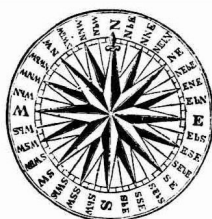


海べの小さな村で

おおえひで





偕成社の創作文学

海 べ の 小 さ な 村 で

NDC 913 偕成社 220p 21cm 1978年

1978年5月 初版第1刷

著 者	お お え ひ で
発行者	今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

TEL (03) 260-3221 (代) 〒162

振 替 東京 5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

8393-720140-0904

©おおえ ひで 小林与志 1978

Printed in Japan

海べの小さな村で

おおえ ひで



● はじめに

ひきしおの浜^{はま}の、岩のかげに、貝がらをな
らべて、女の子がふたり、話をしています。

「うちはな、あおさのごまあえばい。」

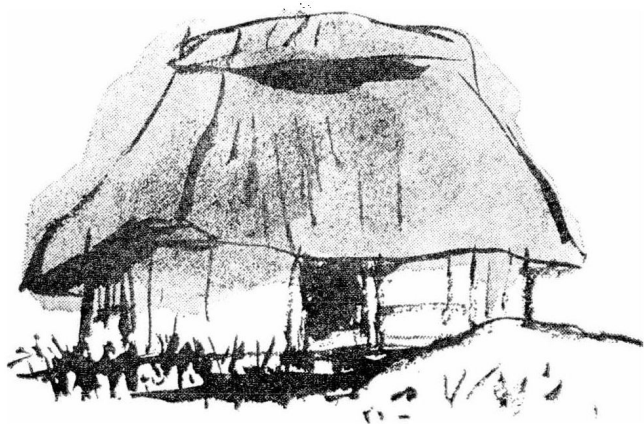
「うちは、ぶりば、さしみにする。」

わたしは立ちどまり、わすれていた、ふる
さとのことばを、いそいでさがします。まる
で波うちぎわで、めずらしい貝がらを、ひろ
うときのように。それから岩にかくれて、し
おから声でいいました。

「そこで、何ば、しよつとな？」

「ん。ままんごとばい！」

と、ふたりは、いそがしく手をうごかし、ふ
りむきもしません。まだ春にははやい日の光
が、沖^{おき}の波にも、砂浜^{すなはま}にも、ふたりのおかつ
ばのかみにも、かがやいていました。



海への小さな村で／もくじ

ひいなさん 7

大潮^{おおしほ} 21

みなえ 37

黒いにわとり 59

ごくらく行き 69

花むこさん 95

夜あけまで 113

ぬすと 129

正月さん 139

桃^{もも}カステラ 165

ひわの実^み 175

友だち 191

あとがき 214

作者と作品について 久保 喬^{くぼ たかし}







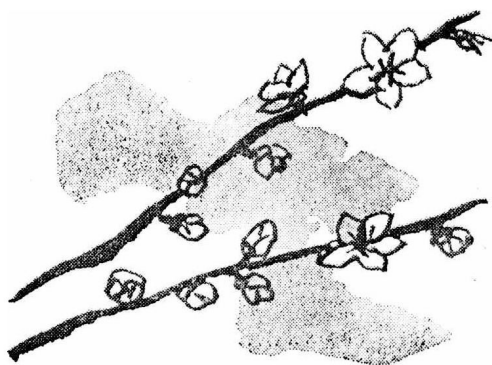
著者・おおえ ひで

長崎県に生まれる。東京へ出て保育園勤務，結婚の後，原爆犠牲者に捧げる鎮魂曲として童話を書き始める。主な作品に『南の風の物語』『八月がくるたびに』『りよおばあさん』等がある。住所／東京都中野区江古田4-42-7

画家・こばやし 小林 よし 与志

1925年東京に生まれる。太平洋美術学校で洋画を学び，1960年ごろから装丁・挿絵に活躍をはじめる。児童出版美術家連盟会員。主な作品は、『パール街の少年たち』『ほくがほくであること』『砂時計』『青春は疑う』など。住所／東京都葛飾区東金町1-36公団住宅1-1225

ひ
い
な
さ
ん



桃の節句のおひなさまのことを、海べの小さな村では、昔ふう^{むかし}に、ひいなさんといっていました。町のほうでかざられるという、りっぱなおひなさまを、村の女の子たちはだれも、見たことはなかったのです。

ユリが、ひいなさんといっつかざるのは、およめにいった姉^{あね}の、古いきもの人形^{にんぎょう}と、上海^{ハイ}みやげのゴム人形と、それから赤いにわとりをだいた、アチャさん人形でした。友だちのスミちいも、セツちゃんも、たいていおなじようなもので、ふだんいっしょに遊んでる人形たちが、節句^{せっきう}になると、どろや砂^{すな}ぼこりをおとして、すまして、ひいなさんにはやりわりをします。ある日母^{かあ}さんがいいいます。

「竹^{たけ}ん谷^{だに}の桃の花が咲^さきよる。もうじき、節句がくるばい。」

すると、なわとびに、むちゅうになっていたユリたちは、ふいに手をはなして、

「やあめた！」

と、てんでに家へとんでかえります。

ユリは、きもの人形のおかっぱのかみを、いそいそとかしてやり、窓^{まど}の下にころがって

いたゴム人形にんぎょうには、ごめんよ、とおじぎしながら、水あびをさせて、どろをおとします。それからアチャさん人形は、これやすいというので、いつも遊びごとには、仲間ななかはずれで、ざしきの床とこの間に立たされているのです。

一年じゅうかけてある、床の間の、鶴つると松まつの絵のよこに、アチャさん人形を中にして、きもの人形とゴム人形を、ならべます。

「みんな仲よくね。アチャさん人形、たのみます。」

それからユリは、去年きょねんもそうしたように、人形たちの足もとに、お手玉てだまや、とっときの貝かいがらをならべます。

「これでよか。節句せつくには、よもぎもちば、そなえるし、桃ももの花もかざるとよ。」

むかいのシミしみちい、は、きもの人形が一つだけでつまらんから、かざるのやめた、といいます。ユリは目をまるくして、

「あの、ほていさんは？」

シミちいのうちの床の間には、すべすべした、せとものづくりのほていさんが、紫むらさきのざぶとんの上に、どっかとすわっているのです。おなかを、へそまでまるだしにして、ひどいたれ目で、いつもウッフッフとわらっています。

「だってえ。ほていさんとならべたら、ひいなさんが、はずかしがる……」

「そ、そんなことはなかよ。ひいなさんもおもしろがって、ホッホッとわらうと思う。それからうちとこね、お手玉や貝がらも、かざったの。にぎやかしはい。」

「ふうん。そんなら、うちもかざろ。いっしょにきてみて。」

「うん。いこいこ。」

スミちいのひいなさんを、かざってるところへ、セツちゃんがとびこんできました。

「ねっ、きいて。おおごと！」

と、ふうふう、息をきらしながら、

「山下の、ウララんとこね。すごいひいなさんば、かざるって！」

「へえ。ウララの母さんが、上海からおくってきたもん？」

ユリがいうと、セツちゃんば、

「ちがう、ちがうの。みさきの観音さまへおまいりの、へんちさんがね、おいていったもんだと。」

「セツちゃんは、そのひいなさんば見たの。」

スミちいがききます。セツちゃんは頭をふって、

「いんや。まだ見てない。いまね、ユリちゃんの母さんと、うちの母さんに、ウララのばあちゃんが、話ばしとる。そいでね、かざったら、見においでって。」

うちきいたけどさ、ほんとのひいなさんは、まるで竜宮のおとひめさんのごとあるって。」
山下のじいさんとばあさんのうちには、去年の夏すぎから、上海うまれの孫のウララが
きています。上海でお店をやっている、ウララの母さんは、店がとてもいいのだそ
うで、小さなまだ五歳のウララを、実家にあずけているのです。

あくる日セツちゃんたちは、学校からとんでかえると、ユリの母さんにたのんで、桃
花をもらいに、竹ん谷へついていきました。やさしい畑のかみの、三本の桃の木は、そこ
はもう、節句がきてるみたいに、もも色の花を、ほろほろとつけています。

「わあ。きれいか！」

一つ年が上のセツちゃんは、さきになって、枯れ草の中を、かけのぼろうとするので、
ユリの母さんは、あわててとめます。

「あぶなか。おまえたち、そっちでまっといで。桃の木の下にはな、ちがやの芽が、つん
つんしとるし、つるくさにはとげが、よけいについておる。」

といって、母さんはかまで、足もとの草をはらいのけながら、木の下へいくと、おなじよ
うな小枝をえらんで、四本折ります。そしておとなしくまっている、三人のそばへきて、
それぞれにもたせるとのこりの一本を大きい子のセツちゃんにわたしました。

「これはなセツちゃん。山下のウララに、やっておくれ。」

「ハイ！」

セツちゃんはよろこんで、思わず谷じゅうへひびくような、返事をします。そして三人は、桃の花を肩にかついで、一列になって、あるいていると、なんとなしうきうきしてゐるのです。はしやぎやのセツちゃんは、思いつきの替え歌まで、うたいだします。スミちいもユリも、もちろんついてうたいました。

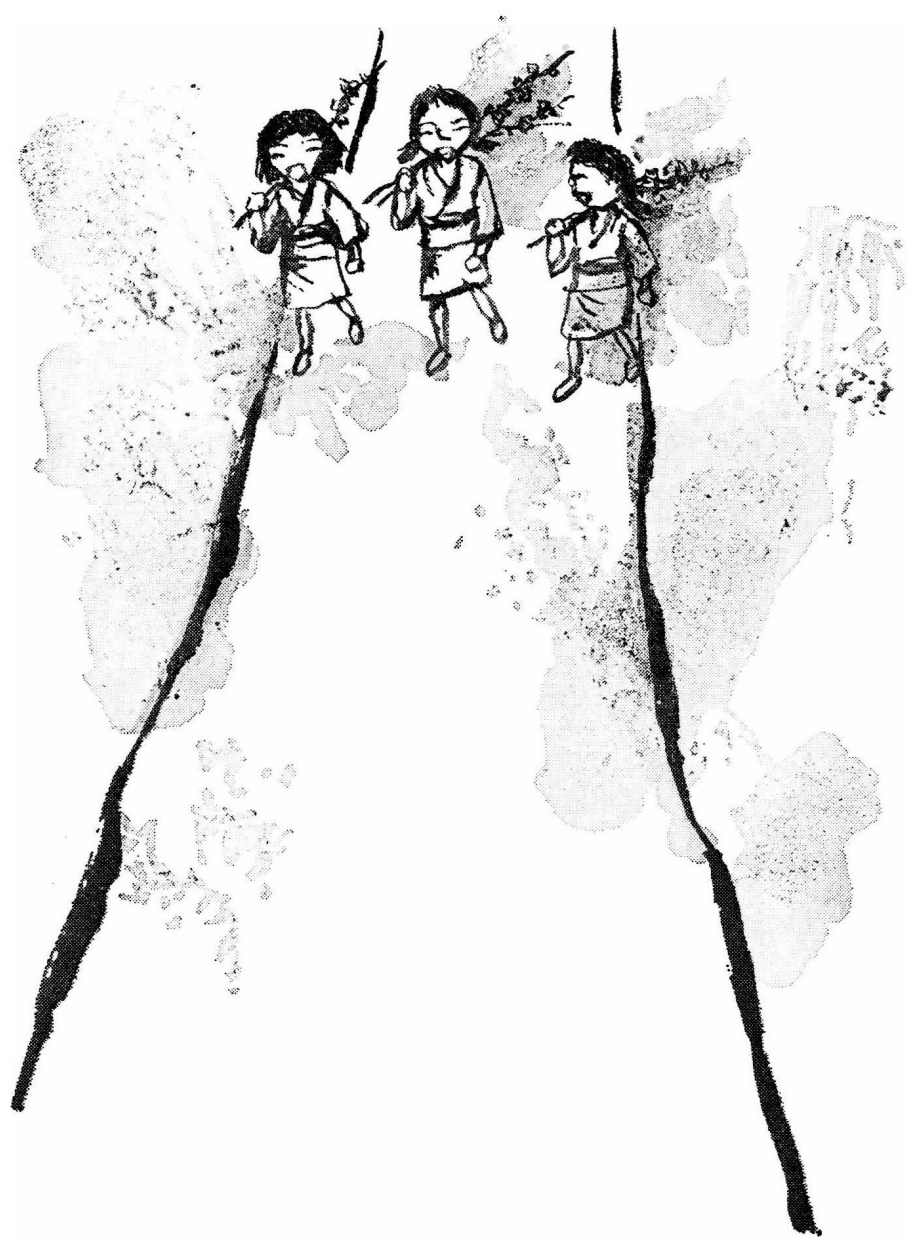
「もも色ばい。きれいかとばい。」

桃の木どんから、もろたとばい。」

なにごとかと、子どもらはとびだしてくるし、とおりがかりのおとなたちは、立ちどまって、にやにやしています。

山下のじいちゃんは、二、三年まえごろから、足の神経痛で、つり舟にのられなくなっていました。そこでいたい足をなだめながら、庭をしきって、とり小屋をつくり、竹がこいをしていまは、にわとりを十羽ぐらいも、飼っています。村の母さんたちは、卵はとっても、体のためによいと信じこんでいるふうで、病氣見舞だとか、子どもがかぜをひいたとかすると、すぐに、卵を買いに走るのです。

ウララが、とり小屋のまえに立って、ユリたちのさわぎを見していました。三人はかけていって、びっくりしているウララへ、セツちゃんはハイッと、桃の小枝をさしだします。



でもウララは、手をだすこともわすれて、ぼかんとしてるのです。するとばあちゃんが出てきて、にぎやかにいます。

「まあまあ。ひいなさんの花ばくれるとな。おおきに。ほらウララ。ねえちゃんたちに、ありがというて、もらいなさい。」

ねえちゃんたち、うちのひいなさんば、見においでな。」

といわれてセツちゃんは、スミちい^いとユリをふりむき、そうしてききます。

「あのう、ばあちゃん。いますぐでもよかとですか。この花ば、うちにおいてきて、それから。」

「ええ。よかですとも。けさのうちにかざってあつと。」

セツちゃんは、小学四年だけでも、体も大きいし、元気がよくて、はきはきしていて、おとなの人に、あいさつするのがとてもじょうずです。だからスミちい^いとユリは、いつもあとに、くっついていきます。でもきょうは、ウララのうちへいくと、ばあちゃんがまっついて、

「さあさあ、おあがり。」

と、いうてくれたので、セツちゃんはいさつするひまもなく、三人は、ざしきのひいなさんのまえに、すわってしまいました。段^{だん}かざりの、みごとなおひなさまというものを、

生まれてはじめて、目のまえに見て、女の子たちはほんとに、びっくりしました。きっとこんなのを、美しいもの、というのでしょうか。三人はみょうに、のどがからからになって、だれも、声が出ません。

いつか、なにかで、見たことのある、かぐや姫のごとある、おとひめさんのごとある、と頭の中で、きれぎれに考えてみても、あんまりびったりしないし、さすがのセツちゃんも、いうことばが、わからないのでした。いままで目にはいらなかった桃の花を、ひな段のわきに見つけて、ほっとしたときです。ばあちゃんがウララをひぎにのせて、ニコニコしながら、声をかけてくれました。

「な、きれいかでしょ。町のもんがかざる、おひなさまばい。

上の段の金びょうぶのまえのが、おだいりさんというてな、男びな、女びなたい。女びなの頭のかざりもんが、きらきらひかって美しかろ。白のいしょうが三人官女さん。それから五人ばやしばい。ちかよって、よくよく見てごらんな。笛や、たいこばもっておんなさる。

下の段のは、わかるな。おぜんや、たんす長持。これは、まき絵のたかつきというて、そなえもんばのせるの。」

ばあちゃんの説明をききながら三人は、上へ下へ、なんども目をうつします。すこし